

連載

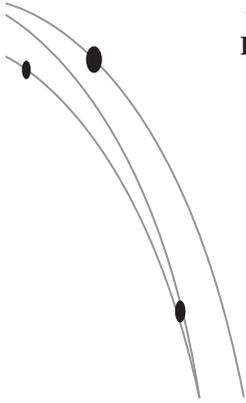
フィールド・アイ

Field Eye

ニューヨークから——③

昭和薬科大学 大理奈穂子

Naoko Ohri



アメリカ女性学の現在

アメリカの学術は躍動的で学際的である。筆者は日本の大学院で修士号を取得し、日本の高等教育界である程度の経験を積んでから彼の地の大学院に入学したが、それだけに日本との勝手の違いに驚かされるのがたびたびだった。連載最終回の今号では、筆者が研究者としてニューヨークで何を学んだのか、専門分野での観察や受けた刺激について語ろう。

◆女性学のエートス

筆者が門を叩いたのは、ニューヨーク市立大学大学院（The Graduate Center, CUNY。以下 GC）の女性／ジェンダー学（Women's and Gender Studies。以下女性学）修士課程である。フェミニズムのメッカのようなアメリカにも、女性学で博士課程を擁する大学院は十指に余るほどしかないのだが、GCにも女性学の博士課程はない。ただ、これは一概に弱点ではなく、女性学という後発学問の極めて高度な学際性の帰結である。従来の学問の男性中心性を批判した女性学は、自らも一つの学問分野として制度化を進める一方で、先発諸学に食い込み、学術のあり方を内側からジェンダー中立的に作り変えることを目指してきたからである。それゆえ女性学では、GCのように、自前の博士課程を持つ代わりに、専門科目を他のさまざまな専攻の博士課程の大学院生に開放して修業証書を与える、認証制度を整備している場合が多いのである。

GCの女性学修士課程が設けている4つの専攻下位区分を一瞥すれば、女性学の大きな特徴であるそのような学際性の高さがうなずけるだろう。健康・科学・技術、政治と政策、社会的・文化的・文学的分析、

LGBTQ 研究という、4つの下位区分である。文理の垣根はもちろん、社会科学と人文学の境界も越えて多様な学問分野を包含する幅広さの一方で、分野としての独立性は、女性学の中核的価値観に捧げられた3つの必修科目によって担保されている。フェミニズムの文献と理論、グローバル・フェミニズム、女性学研究方法という3つの科目である。選択科目には、GCで開講されているすべての科目から、女性学に関わりのあるものを選ぶことができる。これは実質的に、ほとんどどの専攻からでも履修ができる仕組みである。

◆アメリカの学術の学際性

女性学にはこのように、異なる学問分野に働きかけ、溶け込んでいく浸食的な志向性があるのだが、他方で既存の諸学も今日では劣らず領域横断的になっている。人文学のなかでも特に文学、歴史学、文化人類学、美術史といった分野は、積極的に乗り合うことで新しい研究領域を切り拓き、自らの分野を再活性化している。ここでは女性学の個別事情に立ち入る前に、出身はアメリカ文学であり、文学批評とジェンダー研究を専門にしてきた筆者の立場から見えた、アメリカの学術の学際性を概観しておきたい。

文学研究は「息絶えた学問」と呼ばれて久しいが、今日のアメリカの文学科（English Department）はITの活用に教育工学的な熱意を傾けていて、同様に斜陽産業に数えられる他の人文諸学に率先して再起を図ろうと腐心している。また、研究の対象が伝統的な意味での文学にはとどまらなくなっていることも注目しに値する。日記、手紙、回想録、エッセイ、ヤングアダルト（一部はグラフィック）・ノベル、マンガ、アニメ、映画など、およそ人の手で書かれ／描かれたものなら何であろうと読んで批評すべき素材になる。研究対象のこのような幅の拡大は、美術史にも共通して見られる傾向であり、そこでは映像やインスタレーションといったコンセプチュアル・アートの他、手工芸も歓迎されている。即断を恐れずに言えば、国家としてのアメリカの歴史の浅さが、批評的な研究を行う人文学者が、研究に値する未知の作品を探求する際に、過去へさかのぼるのではなくジャンルを広げる方向をとらせるのだろう。通時性より共時性、長さ・深さの不足を横幅の広さで補う発想なのである。

さらに文学批評は、そして一見して美術史も、ポスト・コロニアリズムの後いっそう多文化主義的に、より人種／民族意識に鋭敏になっている。特に、黒人や

ヒスパニック系の作家の掘り起こしが盛んである。白人学生の割合は文科学で目立って高く、それは文学研究が今や「主流文化」に残された聖域であることの証なのだけでも、趨勢としては、文学研究は比較文学研究に限りなく近づき、文学批評と美術批評は互いに越境している。同様に顕著な学際的志向性は、たとえば昨今では Critical Clinical Psychology と称されることがある心理学にもうかがえるだろう。心理学が社会的な考察を深めるようになってきているのである。

◆ポスト・フェミニズムの「女性」学

そのようなアメリカの学術全般の学際性を踏まえた上で、輪をかけて学際的な女性学の特徴をまとめよう。まず特筆すべきは、ポスト・コロニアリズムが社会的合意とは言えないまでも、社会に十分浸透し、生活のなかで実践されるようになってきていることである。たとえば、コロンプスの新世界到達を祝う連邦政府の祝日「コロンプスの日」を、「先住民の日」と呼び変えるような動きである。ポスト・コロニアリズムは先進国に、いわゆる第三世界との関係のみならず、国内の植民地との関係に対しても省察を迫り続けているのである。国際社会学は、そのような時代にフェミニズムが陥った新自由主義との「不幸な結婚」を清算しようと、近年の女性学の有力な一翼を担っている。

また文化人類学の存在感も大きい。今日では、女性学と言えば文化人類学が連想されるほどである。知られている通り、文化人類学ではポスト・コロニアリズムの到来に質的再考を迫られて以降、研究の対象の選択にも手法にも研究者のポジショニングが問われるようになった。たとえば、黒人や女性（特に有色の）が調査・研究のもっぱら対象だった歴史を省み、今日では自身も黒人や女性である研究者が、より対象に親密な立場から黒人や女性の共同体や文化を研究している。あるいはユダヤ系移民2世である研究者が、オーラル・ヒストリーやエスノグラフィの手法で、最晩年にある自身の父親からその生涯を聞きとり、その故郷を訪ねて、戦争で散逸した家族の歴史を再構成するといった研究である。研究の対象やテーマが、より個人的な動機で設定されるようになってきているのである。

他方で、フェミニズムはとうに社会の主流に組み込まれ、少なくとも白人の女性に関しては、女性の権利の擁護や地位の向上はもはや主要な目標ではなくなっ

ている印象が強い。それはたとえば、教育における性差別を禁じる連邦法である、タイトル9 (Education Amendments の一部として1972年制定) の履行を確実にするために、性差別に関する相談や苦情申し立てを専門に扱う部署が、私学を含むあらゆる高等教育機関に設置されている事実などに明らかである（特に連邦教育省の通達に徹底を促された2011年以降。なおタイトル9には、本年5月6日、初の運用規則がセクシュアル・ハラスメントの申し立ての適正手続きに焦点化して付加された。発効は8月14日）。

女性学のポスト・フェミニズム状況を傍目に、近年台頭が著しいのはLGBTQ研究、特にトランス・ジェンダーの当事者研究である。そして興味深いことに、トランス・ジェンダーの活動は、ポスト・コロニアリズムの例に倣うように、社会通念を見直すきっかけになるような生活実践を生み出して、それが一般の人々にも受け入れられているのである。代表的な例が、本人の性自認に意識的な三人称代名詞の採用と定着である。たとえば見た目が男性の人が、自己紹介の際に、自分を三人称で呼ぶときには She/Her/Her を使ってほしいと付け足すのである。なかには They/Their/Them を選ぶ人もいる。単数で中性の人称代名詞がない言語ならではの選択肢と言えるだろうが、自己紹介の作法を改良するだけで性的マイノリティの有徴化を避けることができる、革新的なアイデアである。

また、ジェンダー中立的トイレの漸次的普及もよい例である。本人の性自認に従って、女性用と男性用どちらのトイレに入ってもよいとする制度である。これまた設備投資も不要で、方針として導入すればどこでもすぐに実行できる簡便な積極的差別是正策である。アメリカ人のものの考え方は実に实际的で、学術的な研究の成果は速やかに社会的現実に応用される。トランス・ジェンダーリズムが提案する、日常的な実践から根源的な変化を起こそうとする試みにも、実用性・応用性によって知識や意味、価値の大きさを量るアメリカらしいプラグマティズムが現れているのである。

おおり・なおこ 2020年9月より昭和薬科大学非常勤講師。2020年5月までコロンビア大学ティーチング・アソシエイト。2019年にニューヨーク市立大学で女性/ジェンダー学修士の学位を取得。専門はアメリカ文学・ジェンダー研究。